

道心



歩む

あゆ

住職 横山 正賢

今年の歌会始の勅題は「歩む」でした。禅昌寺の道場に「歩々是道場」と書かれた扁額があります。これは鍊成道場「道心寮」が落成した折りに、私が師と仰ぎ長年ご指導戴き、弟子の泰賢・宗賢の授戒師でもあられる、新居浜市瑞応寺二十九世・前大本山永平寺副貫首改権崎一光老師の染筆です。

仏道修行の用心をお示しになっているのですが、仏道修行に限らずどんな道を修行することにおいても、特別なことではなくて日常の一つ一つ、一步一步が全て修行の道場となることを教示されているのです。

「歩」を「歩」と読みますと、長さや広さの単位となることを考えてみますと、生きていく上での基本とも解釈されるのではないのでしょうか。

道場と言う熟語の意味は「いのちを育む処」ということです。から、「歩々是道場」とは日々の暮らしの一つ一つを大事に生きるという言葉でしょうか。

この「大事に生きる」という生き方とはどんな生き方でしょうか。私は最近自分の人生を振り返ってみることが多くなりました。

人々を始め事事物物との出会いの全てが、私を支え活かしてくれたように思うのです。

楽しい人や出来事に出会って癒され、辛かった事は智慧と忍耐を与えてくれたように思います、人柄に優しさがにじみ出ている人に出会ったとき、自分の優しさは如何かと問いかけられました。

煩惱の燃えさかる享楽に溺れながらも一方で歴史小説や絵画・宗教等幅広く文学を愛する男に出会って、理想ばかりを追いかける自分の生臭さに気づかされた。挙げれば切りがありません。

この様な多くの出会いの中で禅昌寺の伽藍を建築された村上和一さんが、一緒に中国地方の山々を巡って手に入れた檜の用材を製材するとき言われた言葉が「この檜は皆が手を合わせに来る本堂となる縁を持つて生まれてきとるんよ、一寸たりとも粗末にヤクできやんせんけん」とこのように出会った一本の檜に自分の生き様を刻む真剣な生き方が禅昌寺の美しい伽藍を生み出したのではないのでしょうか。

様々な出会いによって自分が活かされていることを感謝するばかりです。

私は最近若い人に出会う毎に「燃えていますか」と尋ねることを心がけております。期待する「燃えている」と応える人

は稀です。思うに「燃える」と言う意味を良く理解していないように感じます。また生きる情熱が伝わってくる若者が少ないように言われる中で、十年前の阪神

淡路大震災の時、救援活動に見た若者の生き生きと活動する姿に、場所と機会があれば自然と燃えるのだと知りました。

戦前戦後世代は、上を上をと眼差しを置いてきた結果、世界に誇る繁栄と物質的豊かさを生みましたが、足下を見つめる地固めを蔑ろにしてきたことを反省するときに、「歩む」という勅題は終戦の還暦を迎えるに相応しい文字と思います。

上を上をと燃えてきた世代の私を始めお互いは、燃え尽きてしまったでは、悠久の日本歴史に憂いを残しはしないかと思えます。

今の時代こそ祖先が遺してくれた「三つ子の魂百まで」の教訓を、幼児が歩み始めた時より一步一步出会う一つ一つが大事であることを次世代へ示すときだと思えます。

孫の手を引いてお寺へ歩みを進めて下さい、お声が掛ければそちらへ歩みを進めます。

子や孫に恵まれなかったお方にも、一人では重過ぎるお荷物も、背負って戸惑っているお方がありましたら、お寺へ荷を下ろしにおこし下さい、何かお役に立ちたいとお待ちしております。

焼き直しの出来ない人生だから、緩やかでも良いから確実な歩みを促されているように思います。

秋の章 第11話

お釈迦様が

出家した理由を

知っていますか。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

してくれました。当時十七歳のSさんの下に年の離れた五歳の妹がいるのに貯えは一銭もありません。それなのに子供二人だけでは家賃が払えないだろうと家主から追いたてられます。

Sさんは妹を連れ、最小限度の荷物を持って、安い六畳ひと間を借り

ました。さいわい就職が決まっていた「両親に代わって、妹を育てなければならぬ」とSさんは夢

中で働きました。朝は新聞配達、昼間は勤め、夜は飲食店のアルバイトと目茶

苦茶に働いて、二十三日の時には古いマンションの一部屋を買

えました。しかしその間、Sさんは働くことしか考えていませんでしたから、食事もお掃除も洗濯もすべて幼い妹さんがしてく

れたそうです。そのSさんは苦しかった頃を振り返りながらこんなふうに言ってくれました。

「NHKのドラマに『おしん』というのがありますが、ぼくの妹だつてやりました。人間、そういうところに追い込まれるとちやんとやれるものですね。考えてみますに、私などはもし両親が元気でいてくれたら今頃、暴走族などにうつつをぬかしてろくな人間になつていなかった

と思います。また両親が財産をいっぱい残してくれたら、今の私はなかつたと思います。幼い妹がいなかつたら寂しくてグレておりましたでしょう。両親はいない、金はない、幼い妹がいる。私は本気にならざるをえませんでした。私を本気にしてくれ、一人前の男にしてくれたのは両親と一緒に死んでくれたお陰、幼い妹を残してくれたお陰と毎日、感謝のお線香を両親の位牌の前に供えています」そんなSさんが一度だけ男泣きしたことがあります。

苦勞を共にしながら立派に成長した妹が良縁をいただいて花嫁衣裳を着た時、「妹の幸せな姿を両親に見せなかつた」と号泣なさつたのだそうです。一生という人生の間にはどんなことが待つているか分かりません。たとえどんなことが起きても、この

Sさんのように「さいわい」と受けとめ、転じていきたいものと私も深く思つたことでした。

常に、この好夢あり

『法華経』の中に、

「常に、この好夢あり」というお言葉があります。そしてそのあとに、お釈迦さまの一代記が出てきます。

いまから約二千五百年前。北部インドに釈迦国という、小さいけれど平和な国があつて浄飯王が国王でした。インドは暖かい国ということも

あるのでしょうか。今でも十五〜十六歳でお母さんになつていて人が多いというのに浄飯王とマヤ夫人はなかなかお世継ぎを授からなかつたのです。国をあげて王子誕生を待ち望んでいるうちにようやく三十歳を過ぎてマヤ夫人が懐妊されました。月満ちて、出産は実家での風習にしたがい、マヤ夫人はお隣のコーリヤ国の王女でしたのでそこへ帰るべくお城をあとにしました。

途中、美しい花の咲き乱れるルンビ二園で小休止をとられた時、そこで急に産気づかれお釈迦さまはお生まれになつてしまつたのです。高齢出産のうえに、出産後の手当ても十分にできないままに王宮に引き返さねばならなかつたという無理が重なつたからでしょうか。マヤ夫人は王子を出産して一週間であつたまわられるのです。

すぐに後添いとして、マヤ夫人の妹さんが興入れをされ、王子シッダールタ太子（お釈迦さまの幼名）は何不自由なくお育ちになりました。しかし、お釈迦さまも人の子、この目でついに見ることでできなかつた母、自分を産まなかつたら死ななかつたすんだかもしれない母、自分の命とひきかえに死んでいった母への傷みと恋慕の思いは、生涯お釈迦さまの心から消えることはなかつたと思ひます。

世に母あるは さいわいなり
父あるも また さいわいなり

と言わないではおれないお釈迦さまの思いは、察してあまりあります。

いまルンビニ園にはお釈迦さまのお母さまを祀るマヤ堂が建つております。先年、インドを訪ね、この堂内のマヤ夫人の前に立つた私は思わず「お母さま、ようこそお釈迦さまを産んでくださいました！」とお礼を申し上げました。

そして祈りを終えて改めてマヤ夫人のお顔を見つめているうちに、ふと私の口からもれ出たのは「ようこそ、一週間で死んでくださいました」という言葉でした。

我ながらこの言葉にハツとし、なぜこんな言葉が出てしまったのかと考えてみました。

色あせることのない幸せを求めたお釈迦さま

マヤ夫人がお釈迦さまをお産みになった後もお元気でおいでになり、お釈迦さまが母なき悲しみを知らずにお育ちになったら、もしかするとお釈迦さまはご出家なさらなかったかもしれない。生まれてわずか一週間の幼な子にとつては自分の命そのものともいえる母と別れねばならなかった悲しみ、この世に生をいただいたそのいちばん初めに最大の悲しみに出会わねばならなかったお釈迦さまは成人されてのちも若さのおごりにも、健康のおごりにも美しき妃や王子としての喜びにも酔

うことができなかったのです。

「諸行無常」というフィルターをかけることによつてたちまち色あせてしまうような幸せ、条件が少し変わるだけで不幸へと転落してしまうような中途半端な幸せではなくて、いかに条件が変わろうと、いかに無常の風が吹きまわろうと色あせることのない幸せはないか、それがお釈迦さまご出家の背景ではなかったかと思えます。そして見出されたもの、それが仏教なのです。

お釈迦さまのお母さまの現身はお釈迦さまを産んで一週間でお亡くなりになったかもしれないけれど、お釈迦さまを通して仏教としてよみがえり、二千五百年余の今日までも数限りない人々の光となつて生き続けておられる、そう考えることができるとは思えない悲しみが必ずあるものではないでしょうか。

これが「好夢」でなくてなんでありましょう。どなたの人生にも避けて通ることのできない悲しみ、授かりとしか思えない悲しみが必ずあるものです。

逃げず、ぐずらず、むしろ積極的にそのことがあつたお陰でこんな人生が開けたというような生き方をしたいこうじゃないかという語りかけがこの「好夢」という教えではないでしょうか。

※(本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より抜粋したものです。)

大泉寺参拝旅行

佐伯区 原 一彦

昨年(2017年)の秋の日帰り旅行は十一月六日、春に宗賢さんが住職に就任された山口県熊毛郡田布施町の大泉寺を訪問参拝しました。晩秋とはいえ暑さも感じる爽やかな行楽日和に恵まれて、約八十名の参加者がバス二台で広島駅新幹線口と禅昌寺を出発し、今年の春に架け替え工事が完工した岩国市の錦帯橋を渡橋・見学した後大泉寺に向かいました。



国道から山に入った古刹で、後背地は山に抱かれて前方は田畑が広がりが小川が流れ、ほっと落ち着く「日本の原風景」そのものでした。山門で宗賢さんご夫婦及び総代さん・檀家の皆様の暖かい出迎えを受けました。

お寺は古くて質素ですが隅々まで清められていて宗賢さん始め檀家の皆様のお寺を護つていく気持ち伝わってきました。まず本堂で方丈さん宗賢さんの読経で厳肅に般若心経を唱えた後に広い境内を散策しました。檀家は少ないが全ての宗派を受け入れている墓地には約二百基があり、新しい墓も多く建立されていました。

その後本堂でお茶の接待を受け、宗賢さんのこれから地域に密着して大泉寺を発展させて行く決意の話。八十歳になられる総代さんの、宗賢さんご夫婦が、入山に至る経緯と感謝と喜びの感極まつての話があり、皆様共々感激

しました。檀家の皆様は若い夫婦を暖かく迎へ入れていて、大泉寺が地域のコミュニティセンターにもなつて、これからの益々のご隆盛をお祈りいたします。

かんぼの宿・光 での昼食会はアルコール・カラオケありで大いに盛り上がり、檀家の皆様の芸達者振りに驚嘆し時が経つのも忘れていました。また、日頃は難しい顔・話をされている方丈さんの人間味溢れる柔和な優しい心に接しられて今まで以上に親しみを感じられたのではないかと思います。

帰途のバスでの皆様は満ち足りた穏やかな気持ちになつておられるなと思えました。私も暖かい気持ちで家路につきました。

防長の山里入った古寺で

若き僧の夫婦愛

未来を拓くぞ 大泉寺

合掌

◆道心・趣味の会◆

短歌

● 白河の関を荒だつ青風
静けき里に二輪草群がる

● ながらえば「会者定離」とう
ことわりを

常とせり去りし人をぞ思う

東区 矢野淑子

俳句

● 光満つ古刹に初の新松しんちぢり

● 自転車の子はどのあたり夕時雨

東区 河野 貞女

◆行事報告◆(十一月～一月)

● 十一月六日(土曜日)

大泉寺訪問親睦旅行 七十二名参加

● 十二月十二日(日曜日)

年末大掃除 家族連れの大勢で
寺の隅々まで奇麗になりました。

● 一月一日(土曜日)

新年大般若祈祷法要は家族連れで
賑わいました。

◆行事案内◆(二月～四月)

■毎月定例行事

● 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日を
予定 午後二時から

※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでご参加下さい。

● 御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招
いて練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講
師の都合により変更する場合もあ
ります。初めて参加される方は、
お寺に電話にてご確認下さい。

■毎年定例行事

● 春彼岸法要

三月十九日(土曜日)

午前十時半より法要・法話に引き
続き護持会総会 十二時より会食
一時解散

■恒例行事

● 青山俊董老師講演会

二月二十七日(日曜日)

午前の部 午前十時半～十二時
午後の部 午後一時半～三時
(坐禅をされるお方は九時より)
参加費 二千元(午前午後のみ)
方は千円) 昼食代一人 百円

※昼食は持参されても結構です。
(お茶はこちらで用意いたします)
◎昼食が必要な方は必ずお電話にて
お申込みください。

大泉寺訪問親睦旅行 (平成16年11月6日)



架け替え工事が完了した錦帯橋を渡橋



約200基が建立されている境内墓地を散策



大泉寺住職(宗賢夫妻)のあいさつ



宿泊は光の宿

四国八十八ヶ所 ご巡拝の旅(一泊二日)



● 日 時 三月二十六日(土曜日)～
二十七日(日曜日)

● 行 先 四十六番札所(医王山淨
瑠璃寺)～五十九番札所
(清滝山西林寺)まで

● 参加費 二万七千円(道後温泉泊)

※旅行の参加申込み・お問い合わせは
お寺までお知らせ下さい(詳しいご
案内をお送りします。)

申込み期限 二月末日

電話 〇八二二五九〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構です。
お寄せ下さい。次号原稿締切は、
五月末日までお願いします。